

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第39回 継承されるもの、変化するもの

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

早いもので、今年も年の瀬が深まってきました。

昨年12月のこのコラムでは、「わが国にコロナ禍が降りかかってきてから間もなく3年。8日には全国で13万2984人の新規感染者が確認され、前の週より1万5000人増えた。しかし、行動制限が解除され、海外から日本を訪れる条件が緩和、イベントの人数制限や旅行自粛も緩和され、観光地や飲食店も賑わいを取り戻しつつある」とコロナの感染状況について触れました。

それから1年。街中でマスクをつけている国民はほぼ9割に上っていたのが、今では1~2割程度に激減しています。病院などではマスクの着用義務付けは継続しており、公共交通機関に乗るときはポケットからマスクを取り出して装着する人の姿を見受けますが、室外の通行人のほとんどはマスクをしていません。

筆者は、この4年間幸いにもコロナにもインフルエンザにもかからなかったのですが、それだけに、自分がウイルスを持っていることに気付かず、他人に迷惑をかけるのではないかと思い、今でもできる限りマスクを着用しています。しかし、急ぎ足で歩いたり、人前で話したりするときはマスクを外すケースが多くなってきました。飲食店のテーブルやコンビニエンスストアのレジ、役場の窓口などのビニールカーテンやアクリル板もあまり見なくなりました。

新型コロナの感染症分類を下げたことから、新聞やテレビが感染者人数を報道することもほとんどなくなりました。

一方で、今年度いっぱい、新型コロナウイルス対応ワクチンの接種はまだ全額公費負担で、筆者も12月末には7回目の接種を受ける予定です。来年度からは、インフルエンザ同様、国民の一部負担による接種に切り替わります。

とは言いながら、今でも、学校などでは時折学級閉鎖があったり、野球やサッカーなどのスポーツイベントの観戦に行った高齢者がコロナに感染し死亡したとのニュースに接したりすることがあります。

4年前以来猛威を振るってきた新型コロナウイルス感染症が、この1年であまり気にならなくなってきたのは、ワクチンや治療薬の開発普及もありますが、感染予防について、皆が学習し、理解を深めてきたからでしょう。その対策が十分ではないところでは、件数は減ったものの、今でも深く静かに流行しているようです。

それにしても、1年前頃からようやく人が集まり始めた繁華街、観光地では、日に日に人出が増えています。特に最近では、外国人の姿を多く見かけるようになりました。欧米の世論調査では「ポストコロナで一番行きたい国は日本」との数字が高くなっていましたし、中国ではゼロコロナ政策が終わり、日本への渡航自由化が急激に進んでいるからでしょう。コロナ前には当たり前だった、外国人観光客のための貸し切りバスも多く見かけるようになりました。平日の東京・銀座4丁目交差点では、信号待ちをしている人たちのほとんどが外国人で、英語や中国語が飛び交っています。

服部時計店の時計台などが見えなければ、日本にいるとは思えないほどです。

そうした外国人観光客が楽しみにしているのは、年末年始の諸行事ではないでしょうか。筆者がよく通る、東京・目黒区の中目黒八幡神社では、これまで出ていた「七五三詣」の職が、12月を迎えて「初詣」に代わりました。境内では神官やその家族がイチョウの黄色い落ち葉を掃き集め、今年一年のお札の「お焚き上げ」の準備に余念がありません。

お焚き上げは、この1年に神道の神社や仏教のお寺でいただいたお札やお守り、自宅にある古い神棚や位牌、さらには亡くなった方が大切にしていたものの遺族が引き継がなくていい遺品などを神社やお寺で供養してもらい、火で焚き上げる日本に古くから伝わる儀式です。神道にかかわるのは別の所でもいいので神社で、仏教にかかわるものはできればその宗派の寺院で焚き上げるのが普通です。各神社仏閣では、12月31日の大晦日にこの行事を行います。しかし、コロナ禍の4年間は、感染予防のため、人が集まるときには焚き上げず、神社の神職やお寺の僧侶が預かり、別の機会にひっそりとお焚き上げするケースが多くなっていました。

神道では「火の神の力で物を天界へ還す儀式」だといわれています。一方、仏教では「物に宿った魂を天に送って供養する。遺族の思い出が多い品物を故人に還す」と考えられているそうです。日本全国各地には、この時期になると多くの火祭りなどがありますが、これらもその発展形とみることができます。

その歴史はよくわかりませんが、8～12世紀ごろの平安時代に、現在の皇室が神に仕える神事の際に神を招くために火を焚いたのが始まりではないかと言われています。それが一般の神社仏閣や民間信仰に広がってきたものでしょう。

年末年始には、本来の神道関係者や仏教徒ばかりでなく、キリスト教など別の宗教の信者や無宗教の人たちも含めて、神社仏閣には多くの人々が参拝し、新しい年を清々しい気持ちで迎えます。諸外国で年越しの際に行われるカウントダウンパーティと同じ趣旨だと思いますが、日本のこれらの習慣は外国人にとっては新鮮に見えることでしょう。

筆者は大晦日には自宅で年越しそばを食べた後、学生時代には古いお札を持って近くの神社に行ってお焚き上げをしてもらい、この日だけ特別に走っている終夜運転の電車に乗って都心に行き、靖国神社、日枝神社、豊川稲荷、明治神宮などの神社を回って初詣をしました。また、車に乗って

伊豆半島や房総半島の東海岸に行き、海から昇る初日の出を拝んだ年もあります。

年越しそばというのは、そばが切れやすいことから、「今年1年の災難や厄を断ち切る」との意味を込めて、大晦日の晩、年が変わる前にそばを食べる風習です。17～19世紀の江戸時代に定着したといわれ、今でも多くの家庭や蕎麦店で行われています。

夜が明けると各家庭では家族そろってお屠蘇を祝い、お雑煮とお節料理で朝食を頂きます。その後、親戚や会社、あるいは取引先、筆者の場合は柔道の初稽古や取材先の首相官邸や政治家の自宅回りで、いろいろな方と新年の賀詞交換をするのが習わしです。こうした行事に参加しているときは、新しい年を迎えた高揚感で背筋が伸びる思いです。

お屠蘇というのは、お正月に無病息災を祈って飲む酒で、その呼び名は「邪気を払い生気を蘇らせる」から来ているともいわれています。最近では、味醂に屠蘇散を入れて、専用の酒器を使って家長が皆に振る舞うのが一般的です。平らで小さな皿のような盃に注いで飲みますが、新年を迎えたお祝いですので、「飲む」という表現に代わって「祝う」というのが一般的です。

お雑煮は焼いたモチに鶏肉や青菜などを添え、汁をかけた正月料理です。地域や時代によって、餅が丸かったり四角かったり、焼いたりゆでたりの違いがあります。また、汁も澄まし汁だったり、白味噌だったり赤味噌だったりします。雑煮の内容により、各家庭の特色を表していて、それぞれの家が大切に受け継いでいます。

お雑煮やお節料理は、正月3が日に街では商店が開いていないので、その間の保存食としてそれぞれの家庭が工夫して作ったものですが、今では、料理屋やデパートなどが作ったものを店で売ったり配達したりすることも多くなっています。また、スーパーマーケットやコンビニエンスストアの中には正月も休まず営業したり、1月1日の元日は休むものの2日からは営業したりしているほか、家庭用冷凍庫も普及しているので、普段食べている物が手に入りやすくなり、こうした保存食が特に必要ではなくなっているのも事実です。

皇居では年末から正月にかけ、様々な神事や宮中行事が行われ、天皇陛下や皇族方は、国民の安寧と世界の平和を祈られます。1月2日にはそうした行事の一環として、新年一般参賀が行われ、天皇皇后両陛下や上皇陛下御夫妻ら皇族方が皇居長和殿ベランダに立たれ、一般国民から祝賀を受けられ、陛下がお言葉を述べられます。この行事はコロナ禍の最中は中止になったり、参加人数が制限されていたりしていましたが、来年（令和6年）からはコロナ前と同じように、だれでも参加

できるようになります。

日本では、こうした様々な行事で旧年を送り、新しい年を迎えます。コロナ禍に加え、昨年2月から始まったロシアによるウクライナ侵攻継続をはじめ、イスラム原理主義組織ハマスのイスラエル侵攻をきっかけとした中東での軍事衝突、さらには北朝鮮の核・ミサイル開発と一向に解決しない拉致問題、中国からの台湾併合への圧力など、世界はきな臭い状況が深まっています。また、国内では政治が混迷し、経済的にも今一つ明るさが見えてきていません。祈るだけではこうした災禍^{まいか}は払しょくされませんが、新しい年を平和の中に迎え、豊かな社会を築くためにも、年末年始の日本は祈りに包まれます。

4年間のコロナ禍を乗り越え、蘇った行事や習慣もある一方、承継されずに途絶えたり、姿を変えてしまったりした行事もあるでしょう。この年末年始の日本の在り方の変化をじっくりと見届けたいものです。